

園のおたより



第 2 号

令和 7 年 5 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

一般に、虫好きな人のことを「虫屋」と呼ぶそうです。本園にはむしやたちがたくさんおられます。少し虫が苦手な私ですが、虫が大好きな園児の、虫を捕まえたときのキラキラした目が大好きです。

入園してわずか1ヶ月の1組さんたちも虫探しを堪能しています。一番人気のむしはやはり「だんごむし」です。ある朝、Aさんに「今日は何して遊ぶの?」と聞くと、「だんごむしを探すの」と楽しそうに返事をしてくれました。ある日、園庭の端で草むしりをしていた時、大きなたんぽぽを引き抜くと大量のだんごむしがわさわさと出てきました。私は驚き慄き後退りをすると、Aさんたちが一斉に駆け寄り、片っ端からだんごむしを捕獲していきました。「あらまあ、頼もしいなあ」と微笑ましく感じました。

むしが大好きな2組のBさんから、ある日幼虫探しに誘われました。幼虫がいそうな場所を教えてもらい、Bさんと一緒にしゃべるで掘り進めましたが、「怖い幼虫出てきませんように」という私の思いが通じたのか、その日は見つかりませんでした。けれどもBさんは先生たちを巻き込んで日々幼虫探しをすすめ、大小様々な幼虫を捕獲しました。多くのこどもたちは、捕獲した虫を持ち帰りたいという気持ちがあります。Bさんも「持って帰りたい」と言いました。Bさんのお母さんに「虫は大丈夫ですか?」と聞くと、「ダメです、けれどこの子が生まれてからは・・・」と言いました。母親の大きな愛を感じ、一方、虫から逃げ回っている自分を少し反省しました。

3組さんのむし博士の一人であるDさんは、ある日「カナヘビ」を見つけたら、お手製の虫取り網を持ち園庭の隅を探し回っておりました。幼稚園にへびがいるのかと、恐れおののいていたところ、E先生にトカゲの種類であることを教えてもらいました。3組さんの虫屋たちが入れ代わり立ちDさんと一緒にカナヘビ探しをするのですが、見つからないと他の遊びに行ってしまうしました。けれどもDさんは、遊びの時間のほとんどを費やし、園庭内のカナヘビの生息していそうな場所を次々と訪れました。結局その日は捕獲に至りませんでした。E先生に本日のカナヘビ捕獲の結果と明日以降の計画を話している勇ましい姿を見て、目標を達成に向けたAさんの「あきらめないところ」に感動しました。

ある日、虫三昧の一日を過ごし帰宅すると、夫が「嫌いだとわかっているんだけどね、玄関の前に変なへびがいたんだよね、知らせておかなきゃと思って」といいます。きっとそれは「カナヘビ」だと説明すると、写真を取ったから見ると、追いかけてくるではないですか。「見ない」と言い逃げ回ったのですが、結局夫はLINEに写真を送りつけてきました。なんだか得意そうな夫のキラキラした目を見て、「あーあ」と少しあきれてしまいました。

「友達」とは何でしょうかー今年度の研究テーマからー

副園長 小谷 宜路

本園では、毎年テーマを決めて、研究活動に取り組んでいます。今年度のテーマは「『友達』とは何でしょうか」です。2年前から共通している「幼児教育への問いに実践から応える」という大きなテーマの下、今年度はその3年目です。1年目は「遊びとは何でしょうか」、2年目は「楽しむとは何でしょうか」と続き、今年度の「友達」とは何かを問うテーマにつながっています。幼児教育での「遊び」「楽しむ」「友達」は、どれも大切にしている視点です。これらの大切さは、幼児期だけではなく、長く続いていくことだとも思います。そして、「遊びとはこういうものです」「楽しむとは、こういう状態のことです」「友達とはこういうことを指します」といった、一つの正解がある問いでもありません。一つの答えを出すのではなく、問いをみんなで共有し、毎日の保育実践を積み重ね、その大切さを言語化しながら応えていきたいと考えてるところです。

今月は、このテーマに沿って、各クラスの「研究保育」を園内の職員で行いました。研究保育の日は、登園した後の1時間程度、1クラスに常勤の職員が集まって、そのクラスのこどもたちの様子を参観します。（担任が抜けることになる2クラスは、講師の先生に保育を進めてもらい、園生活の安定した状態が継続するようにしています。）保育が終わり、その日参観したこどもたちの様子から、こどもたちにとっての「友達」について考えを出し合う会を設けています。参観する側は、およそ1時間の間、そのクラスの担任が挙げてくれた一人または数名の様子を丁寧に追っていきます。じっくり追っていくことで、その人にとっての「友達」の意味が、おぼろげながら見えてくるような感じがします。

今月3回行った研究保育では、このテーマの研究のスタートとして、「友達」とは、目に見える姿としての誰かではなく、一人と一人の間に生まれる「関係」のこととして捉えることを共通理解しました。また、具体的なこどもたちの姿から、同じクラス（同年齢）の人だけでなく、他のクラス（異年齢）の人との間にも「友達」はあるし、こどもと大人（先生）の間にも「友達」になることはあるのではないかな…、人だけでなく、虫や植物に対して向ける気持ちにも「友達」とは何かを捉えるヒントがあるのではないかな…、といったことが話されました。こども同士やりとりの中で、誰かの誘いかけが叶わなかった場面があったとき、入れなかった側の葛藤もあるし、受け入れなかった側にも別の葛藤がある、それをそばで見ている別のもう一人の側には、また別の何かを感じられているといった、人と人との間にあるものを見ていく奥深さも話題になりました。体の距離が近いことと心の距離が近いことはイコールなのか、何か具体的な物を介して生まれる関係はどんな意味があるのかなども、これから考えていきたい視点になりました。



1 くみ

「お楽しみ」

幼稚園で遊ぶことが楽しいと感じている姿がそれぞれに見られ、嬉しく思います。先日はおうちの方と一緒に幼稚園で過ごすひとときがありました。初めて学級のみなと一緒に自然観察園に出かけ、梅の実を収穫しました。梅はこどもたちよりも、ずっとずっと高いところになっていたので、おうちの方が抱っこしてくれました。にこりとしながら、まんまるの青々とした梅を両手に一つずつもぐ姿を見ていました。それからピワも食べました。自然の恵みや旬をいただくことができ、むくむくと体が元気になるような感覚がありました。自然はとても大きく、静かで時にダイナミックです。こどもたちを見ていると同じように感じることもしばしばです。時節はいろいろに移り変わり、そこでしか見られない、今この時こしかない貴重な味わいがあります。旬は、その時にちょうど体にも必要であるという自然のめぐりがあります。大好きなおうちの方と一緒に味わったことで、旬の恵みは体にも心にもたつぷりと満ちているのではないのでしょうか。これから、まんまるの梅がどのように変化していくでしょう。梅シロップができることをわくわくしながら、こどもたちと見ていきたいと思っています。

今、先生と一緒に過ごして安心して遊ぶ姿があって、心を通わせているところが「〇〇さんと一緒に遊びたい」と友達を探す姿や、隣に座ってお弁当を食べたり絵本を読んだりしたいという気持ちも表れています。「〇〇ちゃんはどこ？」と目をキョロキョロさせている人に「一緒に遊びたいのね」と尋ねてみると、大きく頷いた後に「あのね、〇〇ちゃんが待っているんだよ」と教えてくれました。わたしもあの人も同じ気持ちという感覚をもって遊んでいることが伝わりました。それはとっても嬉しいですね。





2 くみ

「名前を呼んで」

新しい年度が始まってから2ヶ月が経とうとしています。2組での生活の仕方がわかって、いろいろなことに意欲的に取り組む姿が見られます。5月になって印象的なのが、こどもたちが互いに名前を呼び合う姿です。新学期に新たな人と出会い、生活をともにしていくうちに、他の人の名前を知り、自分で呼んだり、自分が名前と呼ばれたりすることをととても嬉しそうにする様子があります。

ある日、芝生の上で「相撲」が行われていた時の話です。4月からの園生活の中で一緒にすることが多い二人が相撲を取っていました。最初は力のぶつかり合いで真剣勝負が繰り広げられました。しかし次第に「〇くん」「〇〇くん」と互いに名前を呼び始め、最後には歌を歌いながら小躍りが始まりました。相撲の楽しさとは少し違うけれど、名前を呼びあって、その人がそこにいるだけでなんだか楽しい、そんな関わりが見られたひとときの出来事でした。

最近はクラスみんなで『どこでしょう』という遊び歌を歌っています。名前を呼ばれた人を見つけたり、自分で「ここにいます」とアピールしたりするのが楽しい歌です。26人が順番に呼ばれていき、終盤になってくると、「〇〇ちゃんと〇〇ちゃんがまだだね」など、次は誰が呼ばれるのかを楽しみにする様子があります。大勢で生活している中だと、直接に関わっているように見られない人同士も、名前を知って同じ場で生活している人として知り合っているのだと感じられる姿でした。名前は人と人との関係を築いていくのに必要不可欠なものだと思います。今年の幼稚園の研究テーマは『「友達」とは何でしょうか』です。2組では今まさに人と人が出会って関係が紡がれていく様が日々見られています。同じが嬉しい、一緒だから楽しい。そんな気持ちも大切にしながら生活していきたいと思います。





3 くみ



「大地に触れる」

5月になり、3組では夏野菜の栽培を始めました。ミニトマト、キュウリ、ピーマン、オクラの中から好きな野菜を選んで育てています。普段食べている野菜がどのように大きくなっていくのかを楽しみにしながら育てていけるよう、今回は苗からではなく種から育ててみることにしました。種を初めて見る人が多く、とても小さなものやピンク色をしているものなど、普段、食べているだけでは気が付かないこともあり、実際に見たり、触れたりする中で「この種から野菜ができるの？」と驚く姿がありました。

種を植えた後には、自分たちで畑の土づくりも行いました。肥料や石灰を大きなシャベルで土と混ぜ合わせ、野菜が大きくなるための土台を作ります。「ふかふかのお家にしてあげよう」と土が硬い部分がないかグループの友達と確かめながら土を混ぜ、畑全体がふかふかになり、おいしい野菜ができることを心待ちにしていました。初めて肥料や石灰などに関わり、普段嗅ぎなれない匂いや肥料の材料（野菜の残渣、牛糞など）に抵抗感を抱く人もいましたが、「でも、野菜が大きくなるためには必要なんだよ」という友達のつぶやきを聞くと、納得したように土づくりを続ける姿があり、実際に触れる中でしか感じられないものがあるのだと改めて感じました。

遠足で埼玉大学内の畑も見せてもらうことができました。畑には、自分たちが植えているものと同じ野菜の苗や野菜の赤ちゃんがありました。自分たちが育てている種が大きくなった姿を見ることができ、「早く大きくなるといいね」と収穫することを楽しみにする気持ちがより大きくなったようでした。大学の浅子先生からも野菜の育て方や植え方についてのお話を伺い、自分たちだけでは分からないことを知ることができました。

土や野菜の種など、普段生活している中ではなかなか触れることがないものにたくさん触れながら栽培に関することを3組のみんなと進めています。実際に見たり、触れたりする中でしか感じられないことを大切にしながら、野菜が大きくなっていくのをこどもたちと楽しみにしていきたいと思います。